

話す主体にとって、生きている実感はひとつの行為、「ウイと言う」に立脚します。主体を横切る、ある種の輝きとともに出現するなにかにたいして「ウイと言う」のです！私たちはそこに、生命のあの古代のシンボル、ファルスが現れるのを喜んで認めるでしょう。フロイトとラカンがファルスのあらゆる側面を探究しました。それは消え去り、忘れさせるということに到達し、べつのものに場をゆずります。それはささいな（ちょっとした）諸タッチで扱われるべきものです。

4つのささいなツアー、4つのささいなタッチ

布の上のささいな色彩のタッチによって、「画家の筆から降りそそぐこれらささいなブルー、ブラウン、白、これらのタッチ1」は積もるものです。自身にまなざしを向ける画材のタッチと対面して、画家はその身振りである構成物を誕生させ、それはまなざしを求めて出発します。「生きている実感のもっとも内密なもの2」を探して、語る身体は私たちがタブローと呼ぶものに直面します。

ささいな語のタッチによって、詩人は存在のあの新たな端を存在させます。ある詩人、彼は

語に音的質量を返し、さしあたって語を自由にします。ひとがもっとも現在の的に生きることが
できるもの、つまり詩の行為のために、そうします。詩の行為において、突如、光もしくは
闇において、生きている実感が結晶化します³。

ささいな音楽の調べによって、作曲家は沈黙と出会い赴き、沈黙を聴衆のなかに創ります。
そのようにして作曲家は聞きとることのできない叫びを尊重するのです。作曲家は、その場
において、苦しみと享樂の叫びを住ませます。このようにまとわれた叫びは、世界中のコ
ンサートにおいて場を占めるのです。それこそまさに、身体を横断する、生きている実感で
す。

ささいな衣装をまとうことによって、現代のダンディー（dandy）は自分に新しい身体を構
築します。それは、私たちの生活をいらつかせているソーシャル・ネットワーク上に、良き
一衝撃（bon-heurt 訳注：幸福 bonheur とかかっている）を作ります。ダンディーが示し
ているのは、モードのスタイリッシュで美しい装いが、賞賛者のなかに、ある身体の享樂が、
欲望一様式の欲望、潜在的には依存症的、しかし活性化させる欲望一を、どのように引き起
こせるのかということです。

この空間において、ではいった何が起きているのでしょうか。アーティストが作品とそれを迎え
入れる人々とのあいだに創るこの空間において？ラカンとともに答えましょう。諸作品に固

有の空間において、見かけの道—あまりにも神秘的に美を背負っている見かけの道—をとおして、アーティストは私たちにとり**剰余享楽**を作るものの練り上げを、実行しているのです。

精神分析のセッションにおいては、何が起きているのでしょうか？

セッションで、語る者は、ささいなタッチで、語る材料をセッションに置きます。これらは混じり合い、置換し、圧縮され、互い同士を覆い、沈黙を創出しながら距離をとり、硬直します。それらは要求、語り、個人的神話、幻想、告白、暴露、叫びの形式で置かれます。それは、いったい誰のためなのでしょう？ひとりの聴衆である、精神分析家のためです。分析家の受肉化した現存が、大切なのです。

分析主体のパロールでできた大きなタブローのなかで、かくしてパロールの切れ端が、享楽のあまたの切れ端のように、無秩序に孤立しています。それが語る者にとり、「生きている実感のもっとも内密なもの」を構成するのです。

以上、私たちが多数によって、私たちの精神分析のエコールにおいて寄せ集めたいと思っているものです。各分析主体の、いまの時代に浸透している「センスの深みに〔略〕道がいたる4」この実感から私たちが教えられるもののために。そのとき無秩序は、いっぽうで症状

を作るもの、もういっぽうで居心地の悪さを作るものとの、同時に名づけることでしょう。

無秩序 *désordre* の臨床

分析の臨床は症状を受けつけます。症状は、ある無秩序がそこにあることを示しています。

無秩序は語る存在に衝撃をあたえますが、「生きている実感のもっとも内密なものとの継ぎ目で触発された無秩序 5」のことで。

ラカンがそのように確認したのに続いて、ジャック＝アラン・ミレールはこの無秩序の臨床的兆候を分類するよう、提案しています。それがはっきりとしたものか目立たないものなのか、「まわりの世界にたいするあなたの感じ方、あなたの身体の感じ方、あなた固有の思想への結びつけ方をもって、無秩序が位置づけられる 6」ようにと提案しています。

たとえば、現実界に出現する、**幻覚的パロール**あるいは**兆候があるならば**、それは主体のもつ主体性に侵入してくる無秩序を指し示しています。メランコリーのように、過ちの絶対的な意味作用が課され、それが思想を汚染する場合にもおなじことが言えます。それはときおりは、そうは言ってもより目立たないものですが、以下のように言えます。思考の流れがひ

とつの混乱を導入する。混乱はことばの使用において現れる、と。

主体にとり<他者>としての身体がそこにあるならば、「もっとも内密な無秩序、身体が解体する切れ端7」が引き起こされるかもしれません。ひとつの新たな要素の機能にひとは敏感であるべきでしょう。それはこの身体を保持させること、不安定な苦しみを保つことです。皮膚に切り込み等を刻むのです。

神経性食欲不振症は極端な仕方で身体のこの不気味さ（奇妙さ）を示すものです。それは以降、多くの症状に接合して、「春の目覚め8」が来る時、発症するのです。

思春期臨床は、じっさい、ある契機を範例的な仕方で示すものです。その契機とは、語る主体が自らのメンタル、身体、社会的グループ—手垢のついた諸同一化の形式を実現するようなグループ—、享樂のモード、思考に接合されない状況のことです。それらが主体とその周囲の人々にとって無秩序を作りだすのです。

生きている実感という句に伴っている**現実界のタッチ**は、さいしょに私的享樂の合図を送っていて、文明の<他者>の舞台上でいまやその権利を主張し、そこに無秩序の法—濫用、アディクション、カタストロフィー、武器の際限のない使用の法—を、設定します。主体というものはどのようにそこで犠牲者とはべつの位置を見つけることができるのでしょうか？

21世紀の子供たちはこの挑戦の賭けを証言するものです。HIP(ギフテッド)や注意欠陥障害もしくはADHD(注意欠陥多動性障害)の主体を迎える者のために、素晴らしいことと無秩序のあいだを揺れ動きながら示しています。

生きている実感の倫理

どのようにひとつの語る身体は、無秩序について自らを責任の主体であろうと欲することができるのでしょうか。その無秩序が生きている実感の接合部自体であるときに？このもっとも内密なものについて、主体は何を知ることができるのでしょうか？ラカンが外密 extime の語をもって主張するのは、「私たちにとりもっとも近いもので、私たちのうちにまったく外的であるもの9」のことで。フロイトの語である不気味なもの Unheimlichkeit は、まったく正しくも主観的にそれが出現するときに起こる、この生きている実感に伴う情動を言い当てています。つまりそれは、もっとも親しみのあるものの核との、不気味なものとの関係です。

ここで私たちは偉大な人物たちに助けを求めることにしましょう。ラカンがその教育活動のなかで召喚したヒーローやヒロインたちのことです。不安もしくは苦しみ、陶酔あるいは喜

びのなかで出会われるという意味で、彼ら彼女らはすべて生きている実感とまさにある関係をもつものです。無秩序として感じられるその現存は、語る身体を非人格化し、象徴的な台座から語る身体を排出し、主体をまったく無以下のもののように生きることによって還元してしまいます。しかしながら、逆説的に、それは思いがけないドアをその時開くことになるでしょう。

コロノスのエディプス、アンティゴネと *até*、神々に惑わされた下僕 *Sosie*、オフィーリアの墓のなかのハムレット、クーフォンテーヌの *Sygne* と *Pensée*、ロル V.シュタイン・・・。そして作家たち自身、ダンテ、ルイス・キャロル、ジュネ、ジッド、ジョイスなどが、私たちの導き手となるでしょう。

ひとつの分析経験への回帰

「私たちの[享樂の]モードの不安定さ—それは以降剰余享樂としてしか位置づけられない—」を置くことで、ラカンが現代の主体を剰余享樂—美の魅力として、そして、もしくはそうでなくても、享樂の魅力、ガジェットという対象として文明において提示されるものとしての剰余享樂—の責任を自らがとるよう誘います。

剰余享樂とはラカンによって与えられた名です。主体がその欲望の道に自ら乗り出すとき、

そして<他者>がもはや保証を提供しないとき、主体に向けられているものに対してラカンはその名を与えました。それはまさに、主体が欲動の貨幣、諸対象 a でもって、生きる身体の輝きをもって支払う対価そのものです。主体が、フロイトの表現によればその即物的快楽の獲得 (Ein unmittelbaren Lustgewinn) として、その対象 a の喪失に同意したかぎりではそうです。あまりに親密なこの享樂が取り除かれるなら、今後、べつの利用法のためのドアを開くこととなります。それは諸ディスクールのグローバル化した大市場において交換価値となること、そこで正しい価格でその商品価値を評価させるということです。

しかしこの時は不安がないわけでも危険がないわけでもありません。じつは、語る主体はそのときその身体に、「対象 a としてのその製品 1 2」に還元されています。それはもはや自身の正面に、ディスクールのなかに穿たれた窪みへの記載しか持っていないのです。「非—享樂、貧困、遭難、孤独」です。死の欲動が現存しており、疑いもなくそれは欲望のありうる破壊との出会いです。そこに「生きている実感のもっとも内密な結合」があるのです。

そこは巻き戻しの点です。以降、欲望は、分離 disjonction の現実界—享樂の中心にあります—を偽装することにもはや役立たない、**生けるもの vivant** となります。つまり、性的関係の不在という分離です。

そこでファルスはあらたな機能を見出します。この出会いにより、**話存在 parlêtre** は不調和

的で特異的なマークをもちます。話存在はよいし方でひとつの**エスカボ**を自らに作り上げる
ことができるのです。

そのために、剰余享樂という鍵をもって前進し、そのまなざしに見える世界の染みに向け、
叫びとひそひそ声に耳をかたむけ、好みを味わい、イニシアチブを選ぶこと―〈他者〉ある
いは他者(男性であれ女性であれ)のイニシアチブ同様、自分のイニシアチブのことですが、
何でも構いません！それこそ、生きている実感の輝きが私たちに示すものです。生きている
実感の輝きとは衝撃をあたえながら、〈一者〉と〈他者〉のあいだ、身体と享樂のあいだで
不意に生じるのもので。

大事なのは、そこにあたたなひとつの知が作り上げられることです。私たちの実存を支配す
ると主張する科学主義者のディストピア。身体の寸断化の幻想とその享樂を私たちのスクリ
ーンに映し出すメディアの勢力。つねにより依存的になるような、寄生的諸機械に基づいた
希望というものを約束する、善き予言者たち。これらに対抗するために必要な知を作り上げ
ることが肝心なことなのです。

分析的ディスクールは、それが治療の経験のなかであれ、街の喧騒のなかであれ、人生の意
味の探求を説きません。いかなる生の躍動も奨励しないし、いかなる智慧も形成しません。
生きている実感はもっと軽やかな歩みとともに前進するものです。出会いの偶然性に委ねら

れて、生きている実感は情動を一主体がそれについて言うことのできるものから分かれたれないものとしての、生きる身体を横断する情動を一指し示すのです。それがそのテストをしたり、その生きるセンスを用いるため、唯一の真剣な道なのです。

以上、11月7日、8日に開催される第56回 ECF 大会のプログラムです。

土曜日は同時通訳つきの部屋での臨床の日。

日曜日はより広い領野に開かれた、全体のセッションとなります。

それはあなたがたがいなければなされないでしょう！

1. Lacan J., *Le Séminaire, livre XI, Les Quatre Concepts fondamentaux de la psychanalyse*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1973, p. 101.

2. Lacan J., « D'une question préliminaire à tout traitement possible de la psychose », *Écrits*, Paris, Seuil, 1966, p. 558.

3. Bonnefoy Y., *L'Inachevable. Entretiens sur la poésie. 1990-2010*, Paris, Albin Michel, 2010, paragraphe écrit à partir de notes de lecture, p. 218, 226, 299 & 309.

4. Lacan J., « Kant avec Sade », *Écrits*, op. cit., p. 765.

5. Lacan J., « D'une question préliminaire... », op. cit., p. 558.

6. Miller J.-A., « Effet retour sur la psychose ordinaire », *Quarto*, no 94-95, janvier 2009, p. 45.

7. *Ibid.*, p. 46.

8. Cf. Wedekind F., *L'Éveil du printemps. Une tragédie enfantine*, Paris, Gallimard,

1974 & Lacan J., « Préface à *L'Éveil du printemps* », *Autres écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 561-563.

9. Lacan J., *Le Séminaire, livre XVI, D'un Autre à l'autre*, texte établi par

J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2006, p. 224.

10. Cf. Freud S., *L'Inquiétante étrangeté et autres essais*, Paris, Gallimard, 1985, p.

213-263.

11. Lacan J., « Télévision », *Autres écrits*, op. cit., p. 534.

12. Lacan J., *Le Séminaire, livre XVI, D'un Autre à l'autre*, op. cit., p. 24.